

屏風歌の書かれるまで―近世後期屏風に見る―

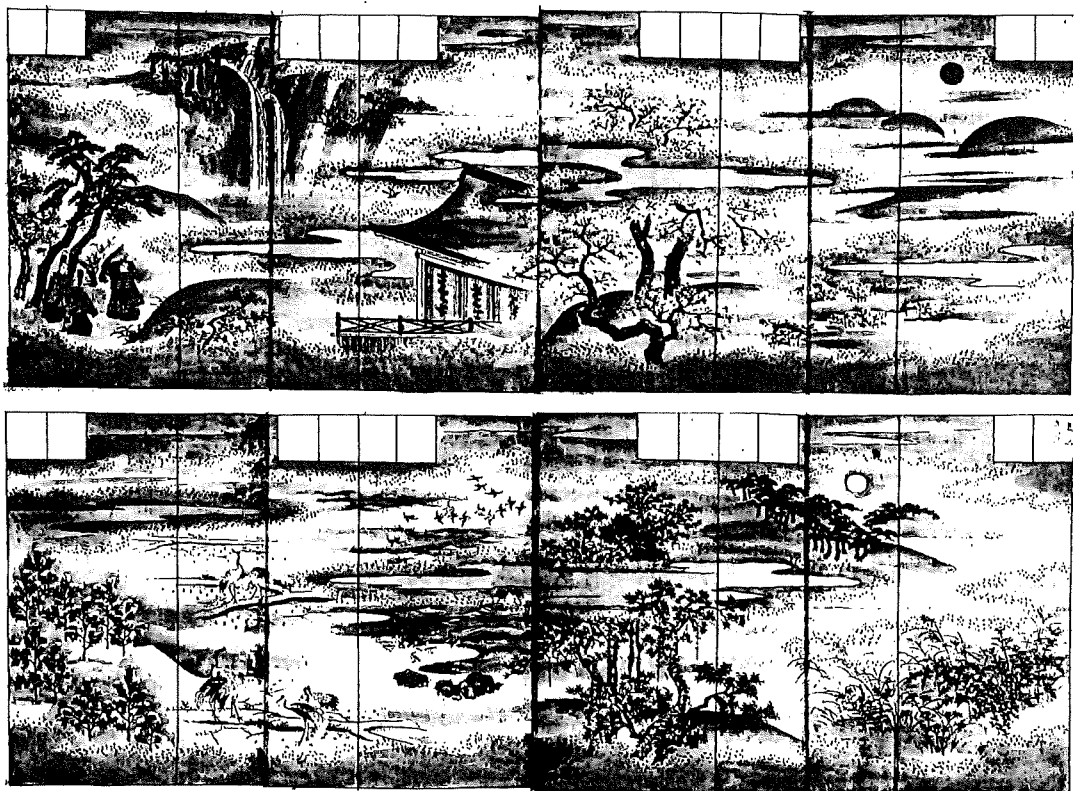
杉本 まゆ子

―
宮内庁書陵部には未整理本が大量にある。故に私の勤務する図書調査室があるのだが、大抵の方は未整理点数六万点以上、と申し上げると目を丸くされる。その大半は旧宮家・公家からの寄贈・購入本で、国立歴史民俗博物館蔵高松宮伝来禁裏本の片割れもこちらで整理中である。さて、その整理は…といえは書誌調査なので特段変わったことはない。ただ、自分が書誌調査を行う場合に比べ範囲が極端に広いだけで、文庫の悉皆調査をイメージして頂ければ良い。古記録や指図など歴史的な資料と文学的な資料が混在していて、そのどちらかが調査対象になるのである。調査をして、出納に引き渡すまでが弊室の仕事である。

その中で興味をひかれたものがあつたので、紹介を兼ねてこの短文を書かせて頂く。偉そうにこのような文章を書ける身ではないし、中古文学対象のゼミ誌に近世の屏風がテーマで申し訳ないが、どうかご寛恕頂きたい。

本稿で紹介するのは「仙院七十賀御屏風画様」(関一三〇二二) 閑院宮旧蔵本である(写真参照)。書誌は以下の通り。

小下図二鋪(①三八・一×一〇七・二糎、②三八・〇×一〇七・三糎、彩色、各々四枚の紙をつぐ)／包紙一枚(三七・七×五一・九糎) ウ



ハ書「文化六年十二月十四日／仙院七十御賀御屏風面様」

つまり、屏風の下絵二枚で、それは文化六年に作られた仙洞七十賀屏風の図様である、ということになる。以下、実際の調査の手順にほぼ従って進めたい。

二

まずは図様の確認である。六曲一双であり、色紙形の数（二十四枚）から考えても月次屏風と察しが付く。それでは、図は何を意味するのか。皆様も写真をご覧になってひと月ずつ図様を割り振って頂きたい。

さて、ウハ書にある文化六年（1805）十二月十四日は確かに光格天皇主催で後桜町上皇七十賀が行われている。後桜町上皇は古今伝受の継承者であり、光格天皇・閑院宮美仁親王・有栖川宮織仁親王等に授けた江戸中々後期の女性天皇である。それではこの屏風について書かれている書物は、と日本古典籍総合目録DB―これは本当に有り難い―を検索する。すると『霜傑亭叢書』（一〇〇―八 越智直澄編 全三十九冊）他にこの屏風歌の記事があることがわかる。『霜傑亭叢書』一二収載のものを『華頂要略』（後述）で校訂し挙げておく。

○文化六年十二月 仙洞御七十御賀屏風和歌

霞 御製

すゑ遠き千年の春の色見へてゆたかにたてる朝霞かな

若草 尹宮美仁親王

まづめぐむ雪間の草のはつかにもいるあらはるゝ春の長閑さ

花 飛鳥井大納言雅威卿

御製は光格天皇、他の出詠者も『公卿補任』等で官職名と齟齬をきたさないことが確認できた（誤写と思われる部分は華頂要略で解消された）。鶴澤探泉は江戸後期狩野派の画師である。なお算賀屏風歌は鎌倉初まで一旦途切れ、江戸時代に入ってからまた復活する。

三

前章で大方はわかったので、次は裏付けとなる。

出詠者の一人有栖川宮織仁親王の家司の日記『有栖川宮日記』（有栖―五〇八〇）を見ると、文化六年九月十九日条に「冷泉前大納言殿御面会にて則書附を以被申上／来十二月／仙洞御賀御屏風和歌／勅題候事／来十月朔日已刻迄御詠進之事／御詠御清書堅詠草にて可有／御献上候事」同十月十九日条に「昨日冷泉前大納言殿より依招罷出候処／御面会にて／仙洞七十御年賀御屏風下絵為見」とある。文中の冷泉前大納言は為章で、奉行らしく屏風歌の締切と出詠方法を知らせ（九月条）、十月中旬には下絵―この画であろうか―を見せている。歌の締切にはまだ屏風は完成していなかったことがこの文章でわかるが、同時並行で行われていたであろうことは察しがつく。『蜻蛉日記』の「左衛門督の、御屏風のことせらるゝとて、ゑ避るまじきたよりをはからひて、責めらるゝことあり。絵の処々書き出だしたるなり」（安和二年八月）などが思い起こされるところである。

そして、「御筆者」とある「青蓮院宮」であるが、文化六年の青蓮院宮は尊真法親王で「伏見貞建親王息尊英弟桜町院御養子延享元正十九生」（門跡伝）とある。そこで『華頂要略』門主伝二十九にある尊真法親王

春風の長閑なる世のはななればちとせも散らぬ色に見えけり

郭公 冷泉前大納言為章卿

ほとゝぎすこすのあふひの千世かけてかれせぬねをももらし初ぬる

五月雨 芝山前中納言持豊卿

あし引の山の滝つ瀬五月雨のみかさにそへるよろづ代のことゑ

納涼 外山前宰相光実卿

立ならず常盤の山の松陰はよその秋をも風やかすらん

秋野 有栖川宮織仁親王

よはひなを野辺の秋とて咲く花に玉なす露は千世のかずかも

月 正親町入道寛空

照らせなを千歳の松の葉山よりいづる最中の秋の月かけ

紅葉 冷泉入道等覚

葛かつら千世くりかへし染かゝるかへでが枝に色をかさねて

千鳥 久世前大納言通根卿

とし波をかけて長居の浦千鳥ともなふ千世の末はかざらん

氷 風早前宰相実秋卿

ある鶴の霜に上毛のおなじ色にむしる田とをくしく氷かな

雪 冷泉左衛門督為則卿

降つもる光も千世の小松原ゆきにさかへは幾本のかげ

御筆者 青蓮院宮

奉行 冷泉為章

画 鶴澤探泉

の文化六年の記事を見ると、

十月廿四日（辛亥）来十二月、仙洞御賀御屏風色紙形和歌御清書被仰出之旨。於非藏人口冷泉前大納言殿執達。（和歌十二首色紙色目分配。／本紙十二枚被出之。）

十一月十七日（癸酉）仙洞御所七十歳御年満御賀宴御屏風色紙形和歌十二枚御清書。被附冷泉前大納言為章卿御献上。（（内は割書）とあり和歌、題、詠者、色紙の色目まで記載されている。また、霞題の光格天皇御製については万葉仮名で記載されており、尊真法親王の清書がこのようであったことが推測される。

四

さて、この題の並びを見てみると、平安朝の屏風歌で見慣れた「雁のなくをきける所」（貫之集・二四）のような「〇〇の××するところ」題でないことに気づかされる。勿論『上代倭絵年表』や田島智子氏『屏風歌の研究』資料篇等を見れば明らかであるが、「仏名」（貫之集・二二）のような単語のみの題も多い。ではこの題の意図はどこにあるのだろうか。

【屏風歌の題】―詠歌内容（十他に屏風に描かれている景物）として比べてみると、

【霞】―霞（十太陽）

【若草】―若草・雪

【花】―花

【郭公】―郭公・こす・葵

【五月雨】―山・滝・五月雨

【納涼】―山・松（十公達）

【秋野】―秋の草花

【月】―満月・葉山

【紅葉】―葛かつら・楓

【千鳥】―浦・千鳥

【氷】―鶴・霜・むしろ田

【雪】―小松原・雪

となる。ほぼ歌中にある材料だけ屏風に描かれていることがわかる。郭公題の「こす」が目慣れない語であるが、これは小簾（をす・万葉集一〇七三）の誤読で生まれた語である。納涼の題は涼むという人的行為が必要になるので、画中に人物を描くのは穏当であり、秋冬の側に月があるので春夏に太陽を配したのも妥当であろう。こう見ていくと―実際に如上の制作状況がわかる中古・中世の作例はごく限られているので、予断は危険ではあるが―、この屏風は歌が詠まれてから詳細な構図が決まった屏風と考えられる。

そしてこの詠歌中、滝と五月雨という組み合わせは屏風歌の盛んな平安中期には見られないもので、それを手がかりにすると、この屏風の題の意図が解けてくる。滝と五月雨の取り合わせの屏風歌は田島氏前掲書資料編によれば、藤原為忠を初例とし、「藤原俊成九十賀屏風歌」に登場する。そこで「藤原俊成九十賀屏風歌」を見ると、すべての題が当該屏風と一致するのである。和歌の師である上皇を俊成になぞらえ、七十と言わず九十賀までも、と言祝いだのである。算賀の屏風に相応しい趣向と言えよう。

五

以上、平安朝の屏風歌制作を念頭に置きながら、小下図ではあるが詳細な絵、制作過程、屏風に書かれた歌が揃う例としてその制作過程を追ってみた。屏風歌の最盛期より八〇〇年以上隔たっているが、現代の

我々よりは遙かに近い感覚を有していたはずの彼らの行動を紹介することで、屏風歌研究の一助になれば幸いである。

なお、当該小下図が閑院宮家に伝来された理由について推測し筆を置くことにする。光格天皇は閑院宮第二代典仁親王皇子であるが、後桃園天皇の養子として皇統を継いでいる。この小下図が光格天皇由緒品として閑院宮家にあるとも考えられるが、弟の代わりに自由のきく美仁親王が実際に賀屏風作成に関わっていたと考える方が素直であろうか。

*1 以下、函架番号のみ記載したものは宮内庁書陵部蔵本である。

*2 『日本仏教全書』 第二二九冊（仏書刊行会編纂、名著普及会、一九八二）。

*3 本文は、新日本古典文学大系『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』今西祐一郎氏他校注、岩波書店、一九八九）により、仮名を漢字に改めた。

*4 『門跡伝』（弘化二年刊の複製、文献出版、一九七八）。

*5 和歌の本文・番号は『新編国歌大観』（同編集委員会編、一九八三―一九九二）による。

*6 『上代倭絵年表』（改訂重版、家永三郎氏著、名著刊行会、一九九八）。

*7 『屏風歌の研究』 資料篇・論考篇（田島智子氏著、和泉書院、二〇〇七）